

# 家たちの還る場所 —集落を舞台とした住民参加型作品による、家と家族の関係性の視覚化—

## The visualization of a local community by the installation

有坂 はるひ  
ARISAKA Haruhi

キーワード: 家、家族、集落、インスタレーション

Keywords : home , family , community , installation

長岡造形大学造形研究科修士課程  
美術・工芸領域 小林花子研究室  
2010 年度修了制作

主査: 小林花子 (長岡造形大学准教授)  
副査: 石原 宏 (長岡造形大学教授)  
副査: 高崎賀郎 (長岡造形大学准教授)

### □コンセプト

本論は実在の集落を舞台に、長い間受け継がれてきた家と、住民の家や集落に対する思い、彼らの肖像を併せて小さな立体作品とし、美術を通した客観的な視点から集落内での家や家族の関係性を捉えようとした試みの経過である。

筆者は新潟県内の一集落の出身で、現在もそこで生活している。家族や先祖が受け継いできた親戚・ご近所同士の関係が現在も続いており、周囲の人を知る時は家族からの情報によることが多い。「どこの家の人間か？」ということが人同士以上に家同士の関わりを意識させ、筆者はふと、個人的な関わりはどれほどもっているだろうかと疑問に感じた。近くに住んでいても、全く知らない者同士が改めて出会う機会とはどこだろうか？

このような筆者自身の体験から、「同じ集落の誰か」について興味を持ち、一つの土俵の上で何かを考える機会をつくりたいと考えた。ひとつの集落内で、家と家族の自己紹介を兼ねた内容にすることで、お互いの新たな一面に気が付くかもしれないという提案である。

### □実現に向けた場所決定

30～50 戸程度の集落全体での展開を設定して作品計画をしていた折、2010 年 5 月開催予定だった企画「旧家の葉壺」(注 1)へ作家として参加させていただくことになった。そこで企画会場の家屋がある長岡市逆谷集落を舞台として具体案を考え始めた。筆者自身とは、それまで全く関わりのなかった土地であり、アプローチの方法を考えながら一年後の実現を目指した。まずは筆者自身を知ってもらう時間を大切にしたいと考え、集落の人が集まり、外からも訪問しやすい行事には積極的に参加し、顔を覚えてもらうことから始めた。

作品への協力を求めるにあたり、「逆谷の文化と伝統を守る会」会合内にて告知の時間をいただいた。内容についての簡単なプリントを配布し、後日会員外にも配り歩いた。

導入から全体に話を回す立場の方々が快く受け入れてくださり、スムーズに行うことができた。また筆者が訪問する前から「口コミ」で作品内容の一人歩きが始まっており、訪問しても話を伝えやすかった。

### □さかしだに逆谷での活動表

—依頼前から個展までの期間の経過を記した。

2009 年 5 月～2010 年 8 月 (表 1 参照)

### □作品内容

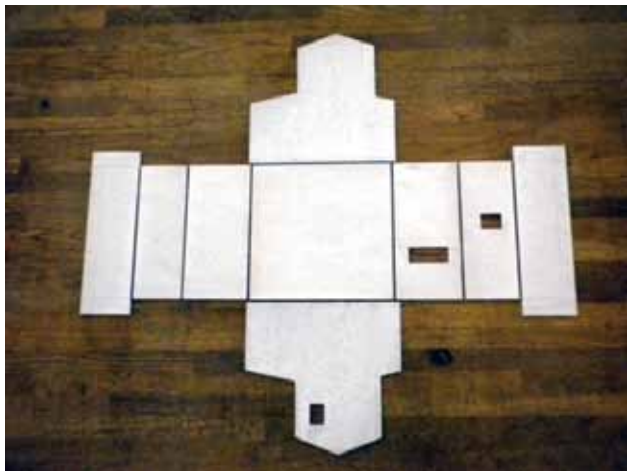
ひとつの集落を対象とした、家・家族単位での参加型作品。実在の家を模した小さな家の中に、住人の言葉や肖像が収まっている。素材は主にベニヤ板、石膏、色鉛筆。

(表 1) さかしだに逆谷での活動表—2009 年 5 月～2010 年 8 月の期間の経過。

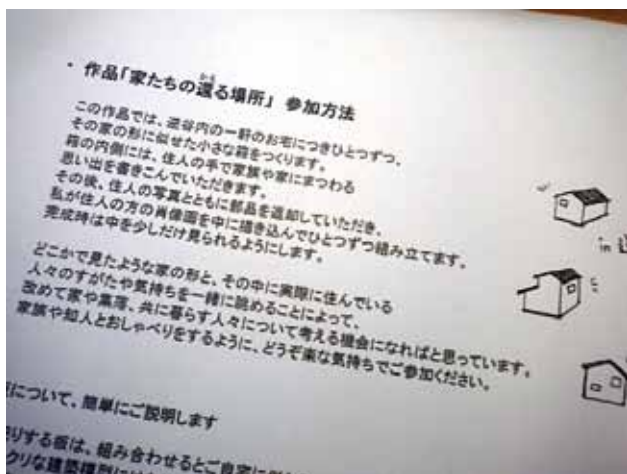
2009.5	逆谷・日吉神社境内で行われた春祭りに参加。 御神楽でヤマタノオロチに捧げられる娘の役をやらせていただく。 (毎年母親役と娘役が観客のなかから選ばれ、参加する)
2009.7	逆谷・寛益寺で行われたオペラコンサートを訪れ、打ち上げに参加。 「御神楽に参加した者です」というと大体の人と会話が通じた。
2009.11	逆谷の「そばまつり」に参加。(現在は「そば打ち体験」に名称変更) 「逆谷の文化と伝統を守る会」会長に、作品についてはじめてお話しする。 逆谷を訪問時に特徴的な数軒を、段ボール模型制作時のモデルとした。
2010.1	「逆谷の文化と伝統を守る会」会合に参加。 小林家から会員に向けて「旧家の葉壺」に関する一連の説明があり、筆者は例として過去の作品を紹介しながら作品の説明をした。 内容が参加型で、協力が必要不可欠とお伝えし、承諾をいただいた。 初回訪問日を伺い、住宅地図を見ながら名前と顔を一致させる作業に入る。この日は会員のみへの告知、残り約半数は訪問しながらの説明となった。
2010.2	逆谷・寛益寺での行事「だんごまるめ」に参加した。 女性が中心の集まりで、家族構成が徐々に理解できてきた。
2010.2～3	家の外観写真を撮るため初回訪問を行う。家族構成の確認、撮影中心。 写真をもとに、おおまかな比率から小さな家を設計。 簡略化のためのスケッチと試作、その合間に初回訪問となった。
2010.3～4	材料の板が揃ったお宅から、「説明書・板」のセットを持って再訪問した。返却を平均で 2～3 週間とし、その間を別のお宅の訪問・板の制作にあてた。3 月後半に肖像画描きを始め、描きあげると戸別にすべての板をスキャン。データに残した後、順次組み立て・塗装に入った。
2010.5.1～31	「旧家の葉壺」開催。土日祝日を小林家で過ごすこととなった。 初日に展示できたのは 5 軒分。週に 2 軒ずつ増え、最終日に 15 軒。 作業が大幅に遅れ、開催中は公開制作をしながらの対応となった。 会場へ来てもらった時に、まだ筆者が訪問できていないお宅や、返却済みなのに会期に間に合わなかったお宅が多かった。
2010.6	「逆谷の文化と伝統を守る会」総会にて、お盆期間にもう一度展示の機会をいただきたい旨をお伝えした。 日吉神社の神主さん・氏子総代の方々に承諾をいただいた。
2010.6～8	返却されたものを描きながら、家の取材と板の養生～訪問というサイクルで引き続き制作。 後半は馴染みのないお宅・大人数の家族の作品が多くなった。
2010.8.7～22	逆谷集落内の日吉神社・境内にて、個展「家たちの還る場所」を開催。 この時点でも家が全て揃わず、制作しながらの展示となった。 すでに返却されていたものと、展示期間に返却があったのが数軒。 最終日のみ集落センターにて展示し、参加全戸が揃った。 お客さんは 2 週間で約 160 名となった。
制作期間: 2010 年 2 月～8 月 (5 月・8 月に展示) 参加戸数: 33 軒 (全戸数 36 軒中) 描写人数: 130 名 (一緒に住んでいない人・故人も含む)	

## 制作手順

- 1 実在の家をもとに、組み立てるとその家の形になる板（写真1）を制作する。家の住人に板と、制作意図を含む説明書（写真2）を配布する。



（写真1）組み立てると家の形になる板。



（写真2）制作意図、手順を記した説明書。

- 2 家族のこと、家の思い出など、住人の手で自由に書き込んでもらう。  
絵や写真、物を入れるなども自由。  
手作りの品や、昔の家の写真、ご先祖が受け取った葉書など歴史的な品もあった。  
（写真3・4）



（写真3）家の歴史が含まれた一枚。



（写真4）家族の紹介、参加者自身の紹介。

- 3 住人の書き込み作業終了後、住人の写真とともに返却してもらう。筆者が写真をもとに肖像画（写真5）を描く。



（写真5）参加者一家の肖像画を描く。

- 4 組み立て（写真6）、実在の家に近い着彩を行う。同様に集落内の家を一軒ずつ制作する。



（写真6）



## □形態と鑑賞

作品を観る際、人の家をそっと見せてもらう感覚を想定した。多くの人が、家には土足で踏み込んでほしくないと感じるのではないか。実際に「見せてもらっていいのかしら」という参加者もいて、作品であっても人の家を垣間見ることに抵抗も感じている点が興味深い。作品自体により身近な感覚で触れる機会として、手で持ち上げて光を入れながらの鑑賞を考えた大きさである。ときに、寝そべて鑑賞する意外なお客さんもいた。

## □展示

### 1 企画「旧家の薬壺」

場所：逆谷集落内・小林邸 囲炉裏端

期間：2010年5月1日(土)～31日(月)

展示の様子は(写真7～9)を参照。

初日に展示できたのは5軒分のみ、その他は開催中に公開制作し、最終日に15軒となった。展示場所は小林邸囲炉裏端と縁側で、来場者は玄関へ行くまでの通りがかり、外からガラス戸から中の様子が見える。筆者は通りに面した明るい場所に机を置き、制作しながら、応対・作品説明などをした。

来場者が家の外から見た時には「小さな家がある」と気付くのに、家に上がると作品と認識されないことがあり、筆者が作品と考えるものが他者にはそう見えないことがあるという興味深い発見となった。

この「作品と認知されない事態」から、作品は制作中には筆者の了見の中で存在していただけであり、社会の中で成立するには他者に観てもらうことが不可欠であるということを考えさせられた。制作中、その背景を切り離して鑑賞者としての視点も持つことは、作者として向き合う作品を突き放し、社会の中でそれがどんな位置にあるのかを冷静に捉える作業ではないだろうか。

### 2 個展「家たちの還る場所」(注2)

場所：逆谷日吉神社と集落センター

期間：2010年8月7日(土)～22日(日)

展示の様子は(写真10～17)を参照。

この時点でも制作と同時進行になった。返却されていたものと、展示期間に返却があったものが3～4軒。最終日によりやうく参加全戸を展示できた。近所から、お盆中に帰省した家族を連れてくる人、5月の展示に来られなかった知人を中心に、来場者は約160名。

## ■日吉神社にて 8月7日(土)～21日(土)

展示の様子は(写真10～13)を参照。

制作当初から、集落の人が集まるために使われている場所で展示をしたいと考えていた。制作しているのは一軒ずつの家だが、すべてを集めると逆谷になる。個人、家族という小さな単位から、家を起点に集落へと拡がり、いつもと違った視点で自分たちの住む場所を見られるのではないかと考えた。

そこで集落の象徴的な場所である日吉神社の境内を会場としてお借りすることとなった。現在は年に数回のお祭り以外では使われておらず、傍らには古いお御輿がしまっている。

お盆は人が集まり、普段は遠くに住んでいる人や、かつて逆谷に住んでいた人にも観てもらえるのではないかと考え、この期間とした。実際に集落の人が子供家族を連れてくる人が多く、様々な人が訪れた。場所柄、集落に関係のある人でないとわかりにくかったのだが、たまたま神社を訪れる人もいた。来



(写真7)「旧家の薬壺」での展示の様子。



(写真8) 逆谷のみなさん。



(写真9) 逆谷の家を観ている来場者。

場者が一日一人という日もあり、ゆったりとした時間が流れた。四方の戸を開けると蝉しぐれのきこえる、風通しのよい会場となった。

集落の人が来ると、神社についての思い出話が始まることも多く、境内が日常的に子供の遊び場だったことがうかがえた。特に、何もなくても過ごせたと述べていた人が印象的だった。場所と関係の強い人に観てもらうことは、その場所に再び目を向けるきっかけになるのではないだろうか。神社自体に興味を持ったり、居合わせた人の話を聴いたりして、場所と人が共有している記憶が引き出されてくることは、インスタレーションという方法がもつ大きな要素であると考えている。作品一軒ずつに、家や家族・集落に対して考えていることや何気ない近況、歴史的な内容も含め、個人的・集合的な記憶と様々な時間の流れがあらわれてきた。そのような内容と照らし合わせても、集落内の歴史ある場所が、舞台として必要であったといえるのではないか。



(写真 10) 個展「家たちの還る場所」会場。



(写真 11) 日吉神社全景。



(写真 12) 三世代で来場してくれた参加者。



(写真 13) 家族連れで賑わう一方、蝉しぐれの中じっとりと鑑賞していく人も多かった。



## ■集落センターにて 8月22日(日)

展示の様子は(写真14～17)を参照。

神社は急な坂道の先にあるため、最終日は階下の集落センターに展示会場を移動した。広い畳の部屋で地図を見ながら、川を挟んだ家の並びをできるだけ再現した。家の順番と距離感のみでの構成となったが、いつも道を歩いていた時を思い浮かべ、実際の集落の見え方に近くなった。来場者にとっては作品と集落が観覧時につながりやすい形になったのではないかな。家々を順番に観てまわり、あたかも集落を一周したかのような感覚で過ごすことができる。たまたま参加者が居合わせると、そこから会話が始まることもあり、終始にぎわう一日となった。

### □様々な世代が集うことへの関心

最終日は家族全員で来てくれた家があった。子供のころ、あの時は〇〇だったねといつまでも語り種になるような出来事があると、大人になってからもそれが家族同士の拠り所になるかもしれない。もし周りに住んでいた大人や子供とも共通ならば、集落での拠り所も増えるかもしれない。

筆者の体験だが、周りの大人を見ると、昔の些細な出来事が定番の語り種になっている。また年を経ると冠婚葬以外で集まることは親戚でも少なくなり、共通の話題も減ってくる。行事や催事に限ったことではなく、小さな子供のいる集落では特に、違う世代が集い、同じ体験をすることは、生活上の様々なことを伝える機会になるのではないだろうか。筆者は、世代が受け継がれていくことは、同じ時間を過ごし、自然に相手を知る中で培われるのではないかと考えている。

### □展示風景からみえたこと

参加者お互いの顔が見える場所で制作を考えたとき、普段から培われている見方が、作品に接することでひとときでも変化しないだろうかと思望していた。生活内の利害関係をこえた部分で同じような体験をし、相手について知ることで、お互いに興味や関心をもつきっかけになるのではないかと考えたからだ。

展示時に参加者の様子を見てみると、日頃あまり行事に参加しない家の完成品を見て、意外だったという反応や、仲間同士で見ながら「いい字書くんだねえ」とか、「こういう手があったか」などと言う場面があった。

培われた見方というのは簡単に消えるものではないし、一朝一夕で解決することもない。しかし参加者が鑑賞している際、周囲の人々へのいつもと違う感覚を直に感じる事ができた。このことから、筆者は美術に関連付けることで、普段の生活で培われている様々な事実・感情が際立ちもし、ゆるやかにもなるという可能性を、今後も模索したいと考えるようになった。

### □参加者について

作品中の板の記述については、家族で一枚ずつ分担したものもあり、世代によって過去・現在・未来への視点の違いがみられる。一軒につき、参加者を限定はしていないが、実際に記述する人物と照らし合わせてみると、家の中での役割が大きく関わっているように感じた。小さな子供がいると落書き板にもなる。作者は家の壁の落書きのように、大人になってからは非本人にみてほしいと思う。

また実際に一人暮らしであることから、内容について一人で書きあげた家も数軒あり、観ている人にとって他と少し違った存在として受け入れられているようにみえた。



(写真14) 逆谷集落センター全景。



(写真15) 朝一番に来場、逆谷のみなさん。



(写真 16) 3人並んで作品を一周した参加者。



(写真 17) 自分の家を観る参加者。

#### □一緒に考えるという視点

書く内容が具体的にならず、困っている参加者には、やり方を一緒に考えて提案した。お茶に呼ばれて、聴かせていただける範囲で会話をしていると、思い出や大切な物が次々にあらわれてくる。それらの一部が文字や写真となり、作品内におさまられている。

筆者がお手伝いしたうちの一軒は、一人暮らしをする80代の方だった。周囲の人から訊ねたことや、筆者が行事へ参加して本人とのつながりを感じた時のことなどを、できるだけ含めて書くようにした。最後に本人にも少しだけ携わってほしいと思い、名前と生年月日を書いてもらった。これも散々やりとりがあって、やっとサインしてくれたのだが。

また、得意なものを作ってもらった家がある。ご夫婦で箒を作っており、集落のあちこちの家でその箒が使われていて、その家の代名詞ともいえる。一日お邪魔して、眼の前で作るところを見せてもらった。この小さな箒（写真18）はそのまま家の中に収められ、制作中の姿を肖像画とした。



(写真 18) 大きさは手の平大、箒草を使用。

周囲の人が観たときに本人らしさを感じてもらえるような内容について、参加者が作品にどう加わることができるのか、一緒に考えることから始めたことは、参加型の作品、美術と日常の接点の両方を考えるうえで、筆者にとって大切な体験であると感じられた。

#### □作品の今後

肖像画を喜ばれたこともあり、参加者には作品を欲しがってもらえることも多かった。当初から、完成後は各戸にお返ししたいと考えてきた。しかし家が集うことで生まれる意味と、一つずつにしたときの個別性、両方の視点を持っている。また制作時から各々が年を重ね、時間がたつほど懐かしさの感じられるような内容でもあるため、再び集合した際には、お互いの作品をまた違った視点で観られるのではないかと。今後もお返しする時期、再び展示する機会を考えていきたい。

#### □企画への参加による作品の実現

展覧会「旧家の薬壺」では企画の立ち上げから見せていただき、企画の必然性と、一つひとつの行いが丁寧に積み重ねられて実現する完成度を間近に感じる事ができた。

筆者は、この作品が企画内の導入的な役割であったのではないかと考えている。敷居が高いと敬遠されがちな現代美術の展覧会へ、日常の延長線上で気軽に訪れてもらいたい。地元を題材にした作品があることは、周囲の人々と展覧会との橋渡しに

なるのではないか。作品内容と、家や暮らしと美術を結びつけるこの企画の主旨に、重なる点も多く、実現に向けて動き始めることができた。

展示会の企画者との関わりや、制作で様々な出会いを経る中で、筆者自身が必然性を感じるテーマや場所について考えることや、制作を続けていく上での立ち位置を意識するようになった。在学中に活動を実現できたことは、足元を少しずつ固めながら発表する方法について考え、実績を作る必要性を意識する上で、大切な経緯になっている。

今後このような方法を行うには、導入として前提があったほうが行いやすい。制作をメインに行える場としては、当初考えていたコンペや、今回のように地域に根差した企画への参加などが考えられる。一方で筆者自身と関わりのある場所をとりあげ、表現を目的としてつながりを作っていくことも不可能ではないと思えるようになった。継続作品のように個人的な取り組みを続ける中で、実現の機会を探りたい。

## □おわりに

本論の「展示風景からみえたこと」で述べたとおり、この作品が筆者と、制作に参加した人たちとのコミュニケーションを通して出来上がったことのみならず、それを地域内で展示することで、作品を通して住民同士もやりとりする機会を得た。またどの家にも作品という共通項ができ、それをきっかけとして住人が集う場を設けたことは、筆者の目的であった地域の人間関係を再認識することにつながったと考えている。

期間中、他所での展示を依頼されたこともあったが、本作品はそこに住む住人が参加・観覧することこそ意義が生じるのである。その場所と作家の出会いから、作品が発生したと捉えると、地域と人との関係が先にあり、作品はそれらの経過の一部であるといえる。ゆえに制作がきっかけとなっただけではいるが、筆者と参加者の関係も一過性のものではなく、流動的に変化していくだろう。それは人と人が出会うことを起点とした、参加型作品のもつ大きな特徴であり、意義ではないだろうか。

制作後、筆者自身が作品へ至るまでの経緯で抱いていた、周囲への視点が客観的なものへと変化した。構想段階では筆者自身の家の内側から、外側へ向けた視点であったのだが、制作中に集落の外側から内側への視点に変化し、やがて境界線が消えたように感じた。外側・内側というのは、あくまで意識の上で作らざるを得ないものであり、それに歴史上の関係や、家などハードなものに加わって、あたかも目の前に現れたかのように感じるのではないだろうか。一旦引いた視点で眺めてみると、何気ないことが関係性や思い込みによって複雑に変化しているように見え、それは筆者が、作品や他者と自己との距離を考える上でも重要な視点であった。そして筆者自身がよそ者の立場となり、集落や住人に対して様々な働きかけが必要となったことは、自分自身を再認識する何よりも得がたい機会となった。

還る場所、これは周囲が変化していても、自分が変わっても、拠り所として残っている記憶を指す。集落は代々続いてきた家たちにとっての拠り所になっている。風景の中にある「家」は時とともに形を変え、やがてなくなる存在かもしれない。しかし住人の記憶の中には、「家」あるいは「家族」、「ともに暮らした人々・場所」が残っているのではないか。筆者は半ば自らがいつまでも残しておきたいこととして、これを作品化した。

作品が完成してから数年が過ぎ、ある家では引っ越しが行われたり、兄弟が増えたり、作品中に登場して亡くなった人もいる。この取り組みで形として残っているのは一瞬の時だが、家たちが還る場所として、人々の中に変わらないことも、作品に含まれてほしいと願っている。

本作品の制作に多大なご理解とご協力をいただいた逆谷の皆さん、本論文の編集にあたってご指導いただいた石原宏先生、そして作品の構想から実現までを見守ってくださった小林花子先生と彫刻家の菅野泰史さんに深く御礼申し上げます。

---

(注1)「旧家の薬壺」

新潟県長岡市逆谷地区にある、寛益寺の御本尊薬師如来寅年開帳を記念して、地区内でも特異な来歴と外観を持つ築約100年の古民家（小林邸）を舞台に、新しい家主である彫刻家と、この建物や地域に触発された有志作家により行われた美術展。

(注2) 個展「家たちの還る場所」

「旧家の薬壺」において発表した作品「家たちの還る場所」の全景を、作品の舞台となった逆谷にて個展という形で再展示した。

逆谷内で公会堂として利用されている集落センターと、寛益寺の鎮守社で祭事に使用される日吉神社にてインスタレーションを行った。